

DEVIL

written by HADEYA

1

「真夜中のサウンドを聴いた事はあるか？」

「……な、何の事ですか？」

「もう一度だけ聞く。同じ質問を、だ。お前は——」

ボビィは問うた。愛用の〈グロック〉を右手に、愛用の〈フィリップモリス〉を左手に。

「——真夜中にしか聴こえないサウンドを聴いたのか？」

「な、な……」

人差し指でトリガーを引いた。金持ちセレブ糞ジジィの脳味噌を吹っ飛ばし、返り血を顔に浴びた。ボビィは血を拭おうともしない。

「今、聴いた。真夜中のサウンドを」

これが後にロンドンを恐怖に陥れる伝説の犯罪者、ボビィ・B——BBの初犯だった。

ボビィは火炎放射器でも破壊不能とされる防盜金庫の前に立った。開け方は知らない。そんなもの知る必要がない。邪魔者は吹っ飛ばす、それがボビィの流儀。まどろっこしい真似は嫌いだ。

ボビィはグロックの照準を金庫に定めた。その時、警備会社の警備員が邸内へ流れ込んだ。全て予定通り。激しい銃撃戦が展開され、ボビィは駆け付けた警備員、九人を皆殺しにしてロンドン警察へ挑戦状を送り付けた。こうして呼ばれる事となったのだ。ブローケンBOMB、と。

金庫を強奪し、ボビィの名は一躍、知れる事となった。快進撃が始まった。

2

ボビィB……つまり、BBの出生について語ろう。

生まれはブリストル。ブリストル・サウンドの全盛期に生を授かった彼は幼少の頃から音楽に恵まれた環境で育つ。父は〈マッシュアタック〉のファン。母は〈ポーティスヘッド〉のファン。一人っ子の鍵っ子でブリストル・サウンドの大ファンだった。

ブリストル・サウンドの特徴として陰鬱なメロディと緩慢なBPMが挙げられる。音楽三昧の学生生活を送ったBBは年を偽って頻繁にナイトクラブへ出入りし、最先端のクラブ・ミュージックを血肉化した。やがて或る天才ミュージシャンと出会う。

ロバータ・ディル・ナージ。通称、速きN。

速きNはBBの天賦の才を一瞬で見抜いた。BBも速きNの才能を瞬殺で見破った。通ずるものを感じた二人は年中無休で音楽論争を繰り広げ、世界強度を鍛えた。時として互いの曲をミックスし、時としてセッションを行い。酒とドラッグ、女遊び……チャカを教えたのも、速きNだ。

91年2月18日、速きNが覚醒剤のオーバードーズで帰らぬ人となった。それをきっかけにBBはロンドンへ旅立つ。当時、アンダーグラウンドの世界では〈サムステップ〉と言うダンス・ミュージックが流行の兆しを見せていた。このサウンドは何かが違う。BBは底知れぬ違和感を感じていた。

或る晩、BBは路地裏で殺人事件を目撃した。腹部を撃たれた女性は声を絞ってブルースを謳っていた。オリジナルと思われる楽曲で、こんな歌詞だ。

点と点は結び付かない。

線と線は結び付かない。

死は突然、訪れる。

アイデアが閃くように……突然、訪れる。

今際の歌を聴き、BBは悟った。スピリットこそ音楽である事を。リアルな歌詞、緩慢なBPM、魂の叫び。ブリストル・サウンドと悪魔のサウンドが結び付く。点と点が絡み合い、縫れた糸がピンと張る。

これ、だ。

以来、BBは突っ走った。深い理由はない。彼女の歌声が……稲妻のインスピレーションがBBを邪悪世界へ引き摺り込んだのだ。多くの者は理解に苦しむだろう。だがこの時、BBが覚醒したのは事実だ。紛れもない事実なのだ。

以後、BBはロンドンのナイトクラブでDJをする傍ら借金取りの仕事を熟すようになる。片っ端から金を巻き上げた。片っ端から悪事に手を染めた。BBはメキメキ頭角を現し、金持ちセレブ糞ジジイの脳味噌を吹っ飛ばすに至ったのである。

3

「金庫は奪った。そして——」

BBは見るからに只者でない軍勢——チンピラに告げた。

「名は売れた」

「その反面」

チンピラの一人、イタリア人が片言の英語で喋った。

「サツにマークされたぞ」

「はっ！」

BBは自嘲した。最高のプランがある時にするBBの口癖だ。

「サツが怖くてヤマが務まるかよ」

「だが——」

「次は電車だ」

「電車？」

BBは愛用のフィリップモリスに火を点けた。

「爆弾で吹っ飛ばす。身代金は五十五億。安いショッピングだろう」

「確かに。で、どうやる？」

「こうやるんだ」

*

爆風と共に地下道を走るノース・イースタン鉄道の先頭車両が吹き飛んだ。乗客の肉片が飛び、脳漿と血塊が飛んだ。予定通りBBは地下鉄道を吹っ飛ばした。阿鼻叫喚と化したアーセナル駅。ロンドン警察機動隊と救急隊員は危険回避の為、立ち往生している。

BBはストック・オープン化したマシンガンを乱射しながら構内を進んだ。そこいらで悲鳴を上げてる眼鏡美人を手荒く掴み、機動隊が待ち伏せる改札へ向かった。

「身代金はまだか！」

BBは叫んだ。時間を稼ぐ事しかサツには出来ない。

「まだだ！」

容赦なく、BBは眼鏡美人を射ち殺した。

「何て事を……」

「いいか、手前等！俺様を嘗めるんじゃねえぞ！俺の名はブロークンBOMB！壊れた爆弾みてえに爆発しちまうぞ！」

BBは機動隊へ向け、威嚇射撃した。機動隊がシールドを構え、応戦する。その時、大地が揺れた。

「な、何だ？」

機動隊は上空を仰ぎ見た。最寄りの高層ビルの最上階が爆風に包まれた。同時に背後の駅でけたたましい爆発音。BBはマシンガンを乱射した。乱射しながら進み、何もかも吹っ飛ばした。立て続けに爆発音が続く。チンピラは様々な場所に点在し、片っ端から公共物を破壊して行く。BBはいとも簡単にパトカーを強奪した。

爆弾テロは失敗に終わった。サツは身代金を払わねえ。となれば、無差別殺人しかねえ。BBはパトカーのアクセルを目一杯、踏み、赤信号の交差点を120キロオーバーで素っ飛ばした。

「どけ、手前等！」

クラクションを鳴らすBBの目は真っ赤に充血している。血の赤、情熱の赤、太陽の赤。この世界を真っ赤に染めてやる。真っ赤に、真っ赤に染めてやる。

BBはギアをトップへ入れた。

4

BBが運転するパトカーは〈プラムステッドRD〉をハイドパークへ向け、疾走中。ロンドン交通警察並びに英国特殊部隊は周囲を封鎖し、戦闘配備に付いた。

BBはカーオーディオのラジオを選曲した。

「……今時、サムステップかよ」

ごちた。放送局のチャンネルを変える。どいつもこいつも下らねえ曲ばかり書きやがる。下らねえ。本当に下らねえ。

「音楽ってのはスピリットなんだよ！」

BBはハンドルを大きく左へ切った。パトカーはスキッド音を鳴らしながら左へ旋回し、見知らぬ市街へ踊り出た。

「行先の分かるドライブに何の魅力がある！」

叫びながらパトカーを走らせた。行先不明。支離滅裂に見えるBBの行動には列記とした意図がある。その意図に誰もが度肝を抜かれ、一抹の感動すら覚えるのである。

車内ミラーを白バイが横切った。BBの運転するパトカーは依然、一般道を猛スピードで疾走中。前方は検問が敷かれているに違いない。袋小路——逃げ道はない。にも関わらず、BBはマックス・スピードで一般道を走っている。一体、何が起こるのか。

「決まってるだろう」

BBは呟いた。確かに。確かに、そうするのがベストだ。

「超絶ドラ・テクだよ」

BBはクラッチを蹴りながらサイドブレーキを強く引っ張った。タイヤが悲鳴を上げ、車体が斜めに傾く。ほぼ同時にギアをトップからセカンドまで落とし、パトカーを百八十度近く回転させながら後方の白バイを追い越した。目にも止まらぬ速さでクラッチを蹴り、ギアをトップへ舞い戻す。

その芸術的な動き。無駄のない完璧なフォーム。

BBは車体を白バイへ衝突させた。一台、撃退。残り三台。一台は車体をクラッシュさせて八百屋へ突っ込ませた。一台は車体をクラッシュさせ、派手に転倒させた。最後の一台はサブ・マシンガンでドライバーの顔面を蜂の巣にしてやった。

BBは急ブレーキでパトカーを急停車させると横転した日本製のオートバイ(ハヤブサ)を起こした。ハヤブサでBBが疾駆する。ロンドン在住、十数年。土地勘には自信がある。猛スピードで道路を右折し左折し、それを繰り返して大通りへ舞い戻る。

日中にも関わらず、至る所でマズルフラッシュが光った。特殊部隊のスナイパー。更に前方に.....数十メートル先に検問所が見える。交通警察は包囲突破を予測し、車両包囲している。これは絶対に突破できない。絶対に。BBの脳裏を或るコミックの台詞が掠めた。

難攻不落の城は存在しない。

その通り。難攻不落の城など存在しない。俺こそが難攻不落の城だからだ。

BBはウィリーしながら疾走を続けた。その時、左右からチンピラが援護に駆け付けた。

BB率いる五台のハヤブサ。迎え撃つはロンドン交通警察と英国特殊部隊。

「行くぞ！」

チンピラは走行しながら手渡した。回転弾倉のグレネードランチャーを。検問所を吹き飛ばす事が可能な小型バズーカ。

完全武装したハヤブサが行く。ハヤブサと化したオートバイが検問所へ向け、猛スピードで突っ込んで行く。

「死ね！」

バズーカが火を噴いた。ヒュウンと言う風音と共に白煙が弧を描き、検問所が爆発した。燃え盛る爆風の中を五台のハヤブサが突き抜ける。こうしてBBと四人のチンピラは包囲突破を果たした。

5

BBを含む五人のチンピラはハイパークへ到着した。時刻は正午を回っている。この園内でイギリス史上最悪の凶行〈壊れた爆弾事件〉が展開されるのである。

BB達は園内に入るなりマシンガンを乱れ撃った。死者16名、負傷者28名。この事件は国営放送を通じて世界へ放送された。この放送を見て憤慨した者がいる。国民的アイドル・ユニット〈ザ・モーションズ〉だ。彼等は公に声明文を発表し、BBを糾弾した。それだけではない。犯行グループの逮捕に協力した者に謝礼を出すとまで宣言したのだ。

ザ・モーションズのリーダーである〈ゼイラ〉はBBとチンピラに挑戦状を叩き付けた。

「お前等は人類の敵だ。私が相手になる。掛かって来なさい」

邪悪と正義の壮絶なる闘いが始まろうとしている。市民は怯えている。天を仰ぎ、どうか私だけは助かりますようにと祈っている……。

6

BBたちはアジトであるナイトクラブ〈サイコ〉のVIPルームで打ち合わせを開いていた。BBは珍しく黙っている。

「BB、どうした？」

BBの目付きが変わった。鋭い刃物を連想させるヤバイ目へ。誰もBBが何を考えているか分からない。

その時、一人の男が室内へ駆け込んで来た。

「た、大変だ！」

男——使い走りは動揺し、顔からは血の気が失せている。

「スクアープッシュの死体が見つかった！」

「……何？」

「や、殺ったのは……殺ったのは……」

BBは立ち上がった。

「行くぞ」

「どこへ？」

「殺られる前に殺る」

「相手が誰かも分からねえのに、か？」

「分かってる」

BBはチャカを抜き、ブローバックした。

「トリップしかいねえだろう」

全員の顔が青褪めた。メイジャー首相を暗殺した伝説の殺し屋——トリップ。徹底的に苦痛を与えてから殺す異常者。筋金入り。そして凄腕。

「あり得ない……」

「スクアープッシュを殺れるのは世界でたった一人、トリップだけだ」

BBはブロウバッグしたグロックを手元でクルリと回転させた。

「こっちも援軍を呼ぶぞ」

「まさか……」

BBは使い走りを見た。

「揃いの革ジャンを呼べ」

「は、はい！」

イタリア人の兄貴が口を挟んだ。

「俺にも伝手がある。現役バリバリの——」

「ヨーク」

BBは使い走りの手から携帯電話を引っ手繰った。電話口は<揃いの革ジャン>だった。BBは言った。

「戦争だ……今夜、いつもの所……厄介な状況だ。トリップ、加えてサツと特殊部隊……そう言うこつた」

BBは静かに告げた。

「戦争勃発だ」

7

BGMはロンドンーの売れっ子DJ、オーキーフィールド。いつもなら戦争前にはウイスキーを呑みながら相手を待つが、今日は戦争の規模が違う。

最初にバーへ来たのは意外にも<現役バリバリのヨーク>だった。ヨークはラフな格好で現れた。パンパンになったブルーのリュックを背負い。それから逆モヒカンと金髪ロン毛——揃いの革ジャンが現れた。厳つい肉体を御揃いの蛇皮のレザージャケットで決めている。

俺たちは一言も会話を交わさなかった。相手がトリップと言う事もあって、ビビっていたのだ。

最初に口を開いたのはヨークだった。

「……噂、本当だよ」

一同が信じられないと言った面持ちでヨークを見る。

「トリップ。ロンドンにいるってさ」

「って事は」

フリーズが息を吐いた。

「今日が命日か」

全員、頭を抱えた。出来る事なら生き延びたい。だが無理な話だ。俺たちは無言の時を過ごした。一分一秒が拷問のような長さだった。

トリップは突然、現れた。ノコノコと。自信たっぷりなのだろう。だからこそ無防備で正面から現れる。その顔を初めて拝んだ。誰も見た事のないトリップの素顔を。

トリップは黒人だった。悪魔のような顔。悪の中の悪の顔。

俺たちは怯えた。悪い奴を五万と見て来た俺たちですらトリップは怖いのだ。トリップのターゲットは俺たちだ。楽に死ねると言う構図はない。方法は一つ。

「殺っちまえ！」

BBが叫んだ。全員がチャカを抜き、トリガーを引いた。マズルフラッシュが目まぐるしく交錯する。天井のスポットライトが割れ、周囲が闇と化した。何も見えない状況下、BBの怒声だけが聞こえる。

「トリップは！」

「いない！ いないぞ！」

「ど、どこに消えやがった！」

「逃げろ！」

奇襲作戦は失敗に終わった。全員がダッシュで散った。散れば、トリップの犠牲になるのは一人か二人に違いないからだ。さあ、逃げろ！

8

ヨークは逃げなかった。逃げると見せ掛け、カウンターの下に隠れたのだ。息を潜めれば、見つからないだろう。現役バリバリのヨークは呼吸を押し殺し、沈黙を貫いていた。

「……誰かいるな」

闇の中、トリップの声。

「サーモグラフィが反応してるぞ」

咄嗟にヨークは走った——裏口へ向け。その時、太腿に何かが刺さった。ナイフだった。倒れたヨークの背中をスニーカーが踏む。トリップによる死のトリップへの御招待。ヨークは未知のウイルスを心臓に注射された。

「うぐうっ！」

「内臓が溶ける新種のバクテリアだ」

トリップは言った。ヨークは体内で臓器が溶けるのを感じ、とてつもない恐怖に囚われた。全身が不自然に痙攣していた。

逆モヒカンが路地裏のゴミ置き場に隠れている。ここまで来れば、流石に追って来ないだろう。ところが、だ。トリップは現れた。

「そこにいるんだろう？」

逆モヒカンは叫んだ。

「分かった、出て行くよ！ 出て行くから勘弁してくれ！」

突然、背後から金髪ロン毛が襲い掛かった。同時に逆モヒカンもチャカを抜いた。二人の不意打ち。トリップは金髪ロン毛の腕関節を取ると、上半身を盾にして逆モヒカンに突っ込んだ。圧倒的な強さで膝の皿を割り、立て続けに金髪ロン毛の膝も割る。

二人は敗れた。チャカで自殺を図ろうとしたが止められた。死より恐ろしい何かが待ち受けているのは一目瞭然だった。

9

BBは全速力で駆けていた。遅かれ早かれ、トリップは現れる。確実に。現れた時、俺が取る行動は一つ——グロックを撃つ事。

「いたぞ！」

ロンドン警察の機動隊だった。同時に前方にトリップが現れた。逆モヒカンと金髪ロン毛の生首を手に。マズルフラッシュが光った。英国特殊部隊に違いない。ゼイラもどこかで一部始終を目撃しているのだろう。

俺が取る行動は一つ。叫びながらグロックを撃つ事。

アドレナリンが暴走する。難攻不落の城など存在しない。弾が尽きるまでトリガーを引いた。全員が一斉にBBに襲い掛かった。BBは死んだも同然だった。

10

夢を見た。甘い夢を。目が覚めると見慣れない部屋にいた。俺は死んだのか？

「気付いたか？」

トリップの声は透き通っている。目覚めて間もないのに意識がクリアなのは何かを投薬されたからだろう。つまり、ここは地獄と言う事になる。

「強烈な苦痛を味わせてやる。想像を絶する苦痛を」

「最期に煙草を吸わせてくれ」

無言でトリップがフィリップモリスの箱を放った。この時になって初めて異変に気付いた。自分が全裸である事に。BBは煙草をくわえ、ライターで火を点けた。チリチリと穂先の焦げる音がする。人生最期の煙草は美味かった。とても、とても美味かった。BBは煙草の味を堪能した。諦念を感じている振りをし、殺す機会を伺っていたのだ。トリップを殺す事を。

何故、そう感じてしまうのか。死んだ筈のかつての親友〈速きN〉が付近に潜んでいる事が煙草の味だけで分かったからだ。

静寂が漂う。トリップは気付いちゃいない。速きNの存在とその圧倒的な強さを。

窓の外を何かが横切った。

BBは煙草を吸う素振りをしている。大きな賭けに出た。

「近くにダチがいる。チャカとナイフを持った俺のダチが」

トリップは首を傾げ、BBを見た。BBは続けた。

「半端な強さじゃないぞ、俺のダチは」

「.....事実か？」

「事実だ」

部屋の外で小さな音がしてトリップは立ち上がった。

「動くんじゃねえ」

BBは強気に出た。賭けに勝ったのだ。

「手前の足には地雷が仕掛けられてる。足だけじゃねえ。手前の全身に、この部屋全体に爆弾が仕掛けられてる」

「爆弾？」

「壊れた爆弾、さ」

言うなりBBが飛び掛かった。窓ガラスが割れ、硝煙弾が撃ち込まれた。室内が白煙で充満し、煙の中を速い何か
が動いた。銃声と怒声、生存本能と殺人衝動。壊れた爆弾は壊れた爆弾でしかない。速きNがいて——ロバー
タ・ディル・ナージと言う炎がいて初めて兵器と化するのだ。

連携。

まずロバータが硝煙弾で室内を白く染めた。BBが飛び掛かり、武器.....付近に置かれたマネーカードを手取る。
トリップの動きは遅い。欠伸が出るほどスロウな速度でハンドガンを発砲する。

背後からロバータが襲い掛かった。左サイドからBBが襲い掛かり、カードでトリップの喉を裂いた。ロバータが猛毒
の塗られたナイフで背中を抉った。BBは右手甲を裂き、左手首をザックリ裂いた。ロバータは落ちたハンドガン
を拾い、トリップのペニスを豪快に吹っ飛ばした。

「真夜中のサウンドを聴いた事はあるか？」

床で呻き声を上げているトリップにポビィは問うた。血塗れのマネーカードを右手に、フィリップモリスを左手に。

「真夜中にしか聴こえないサウンド.....つまり、プライマル・スクリームを」

BBが、ロバータが、目にも止まらぬ速さで伝説の殺し屋(トリップ)を八つ裂きにする。

トリップは死んだ。殺された。

11

「勝つのは一人だけなんだ、相棒」

トリップの死体を足で裏向けにしながらロバータが言った。落ちていたピストルを拾い、BBは答えた。

「生きてたのかよ」

「まあな」

静寂が漂う。次の瞬間、ロバータが目にも止まらぬスピードで銃を抜いた。それより速くBBがトリガーを引く。二つ
の銃声が重なった。BBの頬を銃弾が掠める。

ロバータが倒れた。ピストルを手にしたBBはロバータに接近した。BBは告げた。

「テスト終了か？」

「お前の勝ちだ、相棒」

ロバータの眉間に向け、BBはトリガーを引いた。慣れた手付きでピストルをクルリと回転させ、後ろ腰に差した。BBは煙草に火を点けた。その時、ドアが開いた。その縁には悪魔が立っている。そしてドアの向こうには燃え盛る異世界——魔界が広がっている。

悪魔は告げた。

「お前が勝者だ」

「まあな」

「それじゃあ、行こうか」

BBは煙草を指で弾いた。悪魔の誘導に従って、ゆっくりと魔界に足を踏み入れる。

ドアが閉まった。魔界のゲートは固く閉ざされた。

12

魔界は暑かった。物凄く暑い。邪悪な熱気で満ちている。

「ここが魔界か？」

「そうだ——」

悪魔は答えた。

「——お前はここで永遠を過ごす。我々はゲームの勝者を出迎える」

二人は歩いた。そしてキング・ディモンの前にやって来た。そいつが重い口を開いた。

「お前が勝者か？」

「ああ、BBってモンだ」

キング・ディモンが付近に置かれた火酒のボトルを掴み、ラッパ呑みした。ボトルをBBに差し出す。

「呑め、BB。祝いの酒だ」

BBはボトルを受け取り、火酒をラッパ呑みした。焼けるような度数の酒を。

「悪くねえ」

眩きながらBBはなおラッパ呑みを続けた。

「それくらいにしておけ」

キング・ディモンがBBを制する。BBは止まらない。なお火酒を煽っている。

「それくらいにしておけと言ってるだろうが」

「ホドホドなんて言葉はとっくに捨てたぜ」

そう言って、BBは手にしてるボトルを振り回した。ボトルがキング・ディモンの頭に直撃して砕ける。

「な、何をする！」

付近の悪魔たちが驚きの声を上げた。BBはキング・ディモンの背後に回った。その首に砕けたボトルの先端を突き付け、言う。

「見りゃ分かるだろうが」

「き、貴様……」

BBは砕けたボトルでキング・ディモンの喉を引き裂いた。悪魔たちが恐れ戦き、ドヨメキの声を上げる。BBは宣言した。

「これで俺がキング・デモンだ」

認めざるを得ない。悪魔たちはひれ伏した。BBは魔王の玉座に座り、火酒を煽った。

それだけの話。しがない借金取りが魔界の王になった……それだけの下らない話、さ。(ア)

キリミハデヤ

hadeyakirimi@gmail.com

81-080-9832-0574

モリカワ ケンタロウ 口座番号

三井住友銀行(店番号232) 普通口座 口座番号:7342872